Japanese association of educational psychology

韓・日における幼児の自己概念及び父母の養育態度

ー幼児の父・母に対する愛着（Attachment）を中心にー

李　和　貞
（お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科）

【問　題】

愛着理論は子どもの家族経験と社会的情動的な発達における関係を説明する有力な理論である。Bowlby（1973）は、乳児期に形成された養育者に対する愛着はそのままの形で持続されるのではなく、時間の経過とともに自己と他人に対する信念として再構造化されると主張しその再構造化されたものを内的ワーキング・モデルとして命名した。特に「自己についてのワーキング・モデル（自己概念）は愛着人物に対するワーキング・モデル（愛着）と補完的（complementary）な関係から構築される」と仮定した。本研究では、子どもの主要な愛着人物を母親だけでなく父親にも注目しより家族水準的な観点から上述した Bowlby の仮説について検討する（第１目的）。また、幼児期における従来の表象レベルの愛着研究においては主に子ども側にある要因のみに注目が当てられ、他の外在的要因との関係性についてはあまり問題にされてこなかったと言えるが、本研究では、Bowlby（1979）の「子どもにおける外的な影響としての親の一貫的で主観的な態度は子どもの発達過程において最も重要な要因である」との見解にもとづき、親の養育態度を子どもの愛着表象の形成過程に関与する外的要因の一つとして位置付け、子どもの愛着表象との関係性を二つの文化環境（日本・韓国）において検討する（第２目的）。

【方　法】

＜被験者＞ 予備調査（親子 10 組）を通して尺度を検討・若干修正し、本研究では、東京都内の３６名（平均 5.3 歳）の園児と韓国のイェサン郡の３８名（平均 5.1 歳）の園児及びその父母が分析の対象となった。

＜材料＞ *愛着ストーリー完成課題尺度*（Versehueren et al., 1996, 1999）：愛着に関するストーリーを子どもに完成してもらい、幼児の父・母に対する愛着の内的ワーキング・モデルを探る。完成された各ストーリーは安定型、回避型、アンビバレント型の何れかに分類され、また 3 点法で評定された。評定者間の一致率はそれぞれ、91%、87%であった。

自己概念　*①自尊感情（puppet インタビュー* Cassidy, 1986, 1988）幼児の自分に対する全体的なイメージを３段階評定で測定した(10 項目)。

② 受容感：Harter&Pike（1984）の「認知された受容感」の下位尺度を若干修正・追加して４段階評定で測定した（１３項目）。

父・母の養育態度

Schaefer の尺度 MBPI にもとづき（Hwang、1994；Koo,1995）父母の愛情性養育態度及び自律性養育態度を測定した（38 項目）。

【結果と考察】

まず、自尊感情と受容感を従属変数に、母（父）に対する愛着の質（安定・不安定）×性の多変量分散分析（MANOVA）を行った結果、母親に不安定的な愛着を有する幼児より安定した愛着を有する日本の幼児は、自尊感情（$F(1,32)=7.92$、$p<.01$）と受容感（$F(1,32)=8.25$、$p<.01$）が有意に高い、韓国の幼児は自尊感情（$F(1.34)=10.57$、$p<.01$）が有意に高かった。両国とも父親に対しては有意な関係は見出されなかった。また、幼児の愛着安定性スコアを従属変数に親の養育態度（高・低群）と性の 2 要因分散分析を行った結果、日本の場合、幼児の父母に対する愛着安定性において父母の愛情性養育態度の主効果が見られた。韓国では母親の自律性養育態度と性による交互作用が有意傾向であった（$F(1,34)=3.37$、$05<p<.10$）。日韓比較の捕捉的分析から、韓国の母親はより愛情的態度を示し、日本の父母はより自律的な態度を示すことが見出された。本研究では、幼児の自己概念が幼児の母親に対する愛着表象と密接な関係性が見出され、Bowlby の自己と愛着の補完的な関係に関する仮説は両文化を超えて妥当であると考えられた。また愛着の安定・不安定の起源について考察する際に特定の国・文化における文脈的影響は考慮すべき重要な要因の一つであることが示唆された。

NII-Electronic Library Service